

昭和二十三年三月二十一日
三月二十一日
三月二十一日

凉鹿子



2月号

— 近 詠 —

文化の日 丸山佳子

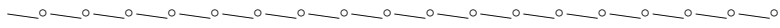
初 笹 子 靈 光 殿 は 奥 の 奥

胸 に し む お 言 葉 賜 は る 文 化 の 日

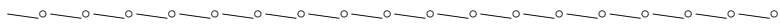
百 日 の 身 丈 け そ ろ へ て 柳 ち る

蛇 穴 に 身 力 本 願 あ な か し こ





スタンプリーへ小走る夫婦文化の日
老人に両手を振らすコロ柿村
京へ十五里熊川新酒みやげにと
トンネル抜け猪の皮干す詠みづらし
離合注意カーブミラーも冬眠期
枯木原捨て児のさまや砂利袋

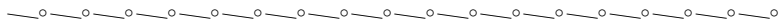


豊田 都 峰

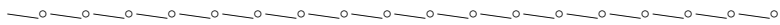
清響集 その八十二

日 当 り の 雑 木 黄 葉 の き ま ま な る
穂 す す き の 日 飛 ば し あ そ び き り も な や
散 り つ く す そ れ よ り 雲 の 冬 お も ひ
冬 の 日 の 庭 に あ り し と 思 ひ る
枯 蔓 や 白 亜 の 塔 は 高 す ぎ る
冬 の 日 の 枝 先 の み の あ り か な る





居眠りはこくり冬日のかげぼうし
問禅のかまへは雨後の冬木立
きちきちと冬はきてゐる石かげに
白砂の流紋の端に冬がある
橋ふたつ越えては枯れを深めけり
枯るる中どこかに素顔さがしけり
オリオンの斜めがかりの大櫓
はづれなる大樹のかけししぐれ星



秀華採集

地方紙を開けばあけび裂けてゐる

奥田筆子

この組み合わせは、楽しい。実際に包まれていたと見るより、「地方紙」の中でも裏でもよい、そこに裂けている「あけび」を連想する風土性の表現は楽しい。

十三夜見せずかくさず香袋

松井鶴子

国引の神有月の大没日

古林美世子

前句の香袋の在り方と十三夜との思わせ振りはよい。後句の「大没日」に出雲への思いが滲んでよい。

鈴鹿 仁

雪 虫

雪虫の離れがたきは知命たり
蟻螂枯るその後は知らず山太る
魯田や白紙に戻す農ごころ
まほろばの京を守りて初比叡
初がすみ年輪加ふ鞍馬杉
初ごよみ昭和の文字のなつかしく

沢村竹径姉追悼

一葉落つ悼みの風となるひと日

近 詠

宇都宮滴水

葉ぼたん

葉ぼたんや心の角にある円さ
此岸にも余る一月海女の小屋
粧ひて羞じる暇なきさくら草
春の雷水平線は消えざりし
啓蟄の刻つれ風は急ぎけり
葉ぼたんの廻りすぎたる彩となる
黒地着て悔む間のなく春逝けり

神麓集



木の葉髪螺旋階段駆け上り
遠き日のまぶしき水よ浮寝鳥
手術する枯かまきりの手がこわい
ぼうぼうと枯れの女郎花男郎花
猫じやらしぶらさがる世はさかさまに

新関 一杜

六歌仙 林 日圓

光悦の樵夫蒔絵や月おぼろ
光琳の紅白梅図紅強し
風光る古筆手鑑翰墨城
樹下美人六歌仙切れ花あざみ
仁清の藤花茶壺風薫る

十三夜 北村 香朗

窓格子いま昇りたる十三夜
一人居の卒寿のわれに後の月
祝千号目前にして秋うらら
戦友が物故の寸楮秋深し
葛飾の輪より離れし桐一葉

魁(山国祭) 丸山 冬鳳
今日ばかり方言まる出し山国祭
御輿立つ里田櫓の露きらら
歩武堂堂びいひやらどんどん山国祭
秋桜参道篝の御輿征く
山国祭 錦二流を 魁に

京しぐれ 藤岡 紫水

荃石や放下の僧の瓢逸な
峰ごとに薄ら日を抱く京しぐれ
岩走る水に彩置く散紅葉
屋酒の箸にくづして煮大根
干大根ことりと山の暮れかかる

倉敷 和田 照海

秋柳雁木にひとつ紡い石
柳散る路上ひさぐ光りもの
萩刈りて風筋通り人通り
風鐸にからむ野の風刈田風
穂芒や夕日の中の国分寺

神麓集



雁渡る淋しい人から行く寝床
生涯も一つの戦記銀杏散る
人形の嘘も本音も菊の中
行く秋を書くに余白の狭すぎる
長き夜や計算済みのことばかり

松田 都青

幕末の剣豪武楽碑の秋暑
生家跡道場跡と言ふ秋思
大石神影流祖の墓の昼の虫
高弟に今村兵衛露万朶
花芒天へ伸びきり剣豪碑

角 直指

偕老をなかば果して山の梅
阿と吽の吽は黙して寒明くる
書斎派へ善は急げと梅だより
はうれん草體は水といふ不思議
どの家も追はれし鬼の行きどころ

僧老の梅 竹貫 示虹

まだ青く小さき仏手柑手をすぼめ
温室の一隅砂漠サボテン群
室咲きの夜来香の香に溺る
色づくに間のある真弓の房なす実
色褪せし紫苑ひと叢ただ茫茫

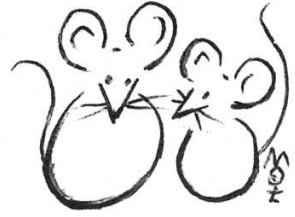
植物園 丹生をだまき

すれちがふ人の会釈や冬ぬくし
時雨傘久に訪ふ人案じつつ
足許いまつはる仔犬紅葉晴
時雨来て路傍の石を先づ濡らす
考える枯芦となる湖の風

時雨傘 船越 美喜

病院の窓の読書の穂田明り
陽の香溜む稲架に遠嶺の暮れ残る
新酒蔵柳はすでに大揺れす
川風に蝶の重さを足し枯れる
里山は冬陽を這はせ円く昏る

新酒蔵 松本 鷹根



京鹿子集

豊田都峰選

遠き日の見ゆる空あり大刈田

京都 奥田 筆子

草紅葉つかつか踏んで吉備のひと

スーパーの目玉切り売り大根かな
過去がみな模様となりて紅葉散る

相生 古林美世子

地方紙を開けばあけび裂けてゐる

国引の神有月の大没日

夕映えの秋雲より生れ三鴉

渡り鳥見上げて自問自答かな
冬ともし舞妓差し出す花名刺

玄関は四階秋蝶墮ちてゆく

ウクライナの少女砂漠の夏を越す

十三夜見せずかくさず香袋

三原 松井 鶴子

アリソナ 伊吹 之博

蒔絵より摘み来し野菊文机に

日本人の顔に戻りて秋刀魚焼く

一振の竹刀初秋の風分かつ

せせらぎが響くアリゾナ山の秋

美山にはみやまの風や曼珠沙華

会ふたびに笑顔が増える秋少女

雑木山主役を競ふはぜもみぢ

秋の日が落ちるまでにと洗車する